＜東北地区納税貯蓄組合連合会会長賞＞

「入湯税から学んだこと」

福島市立福島第四中学校

３年　佐藤　太暉

ぼく達の生活の中で、当たり前のようにある税。身近なところで消費税がある。買い物をすれば必ず付いてくる消費税８パーセント。おつりをお財布に入れれば、小銭でいっぱいになる。また、消費税分が足りなくて、買い物ができない時もあった。ぼくの中では、「消費税って何？」と思いながらも、生活の一部となっている税について理解しようとしなかった。しかし、授業でぼく達の生活は税金によって守られていることを知り、以前から気になっていた事について調べてみようと思った。

ぼくは中学生になるまで、アトピー性皮ふ炎がひどく病院に通院していた。そして温泉にもよく行った。ぼくのアトピーには、アルカリ性単純泉の泉質がとても効き、この成分のある温泉を探しては、祖父母がいろいろな温泉地へ連れて行ってくれた。そして、どの温泉でも目にしていたのが、入湯税である。入湯税とは、鉱泉浴場の入場客に課す地方税である。これは宿泊をするか日帰りにするかによっても金額が変わってくるが、おおよその標準税率は大人一日当たり１５０円を徴収される。この入湯税は、環境衛生施設、消防施設などの整備や観光振興に要する費用に使用される。これによってぼく達が快適に過ごせる環境が作られているのだ。

その入湯税が、最近各地で新しい取り組みが始まっている。全国の温泉ランキング第１位の箱根では、２９年度の入湯税収入がおよそ７億円にのぼる。これを観光まちづくりに活かそうと取り組みが始まった。また、北海道釧路市では環境整備を目的とし、期間を設けて税率の１００円引き上げを検討している。阿寒湖温泉の国際観光プロジェクトだそうだ。各温泉地の条件は異なるが、入湯税の有効活用についての考えが全国に広

がっている。

このように、入湯税を挙げただけでも、さまざまな取り組みがあることが分かった。

入湯税とは、たったジュース１本分ほどの税金である。しかし、そこに生活する人達の思いを込めて、有効に活用しようとしていることが分かり、ぼくは感銘を受けた。

政府は消費税率１０％への引き上げを平成３１年１０月まで延期することを正式に表明している。増税ニュースが出る度に国民からは「税金は何について使われているのか不透明だ」という声が上がる。マスメディアが発表した世論調査においても、国民の７割が消費増税に反対との回答を示している。

しかし、財務省は増税とは景気の悪化ではなく、社会保障の安定化としている。国に納める国税、そして住んでいる地域の自治体に納める地方税。まずは国民一人一人が税に関心を持ち、これからを正しく理解していくことが大切だと思う。ぼく達の生活を守ってくれる税について、ぼくはとても興味が湧き、もっと深く学んでいきたいと思った。